和　文　要　旨	
論文題目	小説という舞台、語りという媒体： 太宰治文学におけるパフォーマティビティと翻訳の（不）可能性
氏名	シルウィーディー　サラ

太宰治の文学は、その独自の文体と語りの技法によって際立っている。多くの作品において、語り手は語りかける相手や自身の立ち位置をめまぐるしく変え、それに伴って人称も自在に変化させる。この語りは、固定された視点から一貫して語られることの多い私小説とは異なり、舞台上の役者が役柄や声色を使い分けるかのような効果を生み出している。その結果、語り手と読者との関係性や、読者と物語世界との距離感は流動的に再構築され、特有の没入感と緊張感が創出されている。

太宰の語りの声は現在に至るまで多くの日本人読者の心に響き続けており、その主要作品は20以上の言語に翻訳され、国際的に広く受容されている。近年も新たな翻訳が刊行され続けているが、太宰らしい語りの魅力を損なうことなく他言語において再現することは、翻訳研究における重要かつ困難な課題である。

本論文は二部構成をとる。第一部では、『道化の華』や『桜桃』をはじめとする作品における一人称・二人称・三人称の多様な視点とその変化に注目し、語りの多層性と語り手の立ち位置を明らかにする。また、『お伽草紙』や『猿面冠者』、さらに『懶惰の歌留多』を取り上げ、太宰の文体が落語をはじめとする口承文芸とどのように呼応し、特有の読書体験を創出しているかを論じる。第二部では、既存の英語およびアラビア語訳を精査し、人称代名詞や語りの声の翻訳が原文のパフォーマティビティをどの程度再現し得ているかを検討する。第二部では、既存の英語およびアラビア語訳を精査し、人称代名詞や語りの声の翻訳が原文のパフォーマティビティをどの程度再現し得ているかを検討する。また、それらの翻訳上の選択が、原文の語調や読書体験にどのような影響を与え、あるいは変容させているかについても考察する。

本論文は、太宰の声が「翻訳不可能」であると論じるものではない。むしろ、一見翻訳不可能に思われる人称の変化やパフォーマティブな声、多層的な語りこそが、最も翻訳すべき核心であると主張する。それを伝えるためには、翻訳者が太宰および登場人物と共演する「共同演者」（*co-performer*）としての役割を担い、原文における語りのパフォーマンスを再演することで、読者を物語世界に招き入れる必要がある。

太宰文学の語りをパフォーマティブな営為として位置づけ、それを口承文芸やパフォーマンスの伝統と結びつけることで、本論文は、従来、日本国外の研究においてしばしば見られる自伝的解釈や自伝的還元を超える、新たな方法論的視座を提示し、太宰研究に新たな展望を切り開くものである。同時に、翻訳をパフォーマンスの一形態として捉える視点を導入することで、翻訳研究にも貢献し、太宰文学の語りを他言語において再演するための実践的戦略を提起する

キーワード：太宰治、パフォーマティヴィティ、語りの文体、翻訳の不可性、英語、アラビア語